

八世紀以前のトゥルフアン地方の農業生産について

宮 崎 純 一

一

先に私は八世紀以前の中央アジアの農業問題を扱ったとき、東トルキスタンのトゥルフアン・カラシャール・クチャ・カシュガル・ホータンの五地域を中心に考察を試みた^①。しかしその後、唐長孺氏の講演を通じて、中国においてトゥルフアン文書の総合的整理が大いに進歩していることが分り、新知見の多くに接することができた^②。更に最近文書集の第一冊から第五冊までが刊行され、その原文に接し得ることになったことは、トゥルフアン史研究に画期的な発展をもたらすことは疑いない。故に本考ではトゥルフアン盆地のアスターナ・カラホージャ古墳群から出土したこれらの漢文文書の第一次史料を中心に、従来から利用されてきた大谷文書等の同古墳群出土文書も加えて、この地方の農業の実態を私なりに整理してみたい。以下にそのことを述べるが、最初に日本及び中国の学者が八世紀以前のトゥルフアン地方の農業生産についてどのように考えていたかを回顧しておきたい。

八世紀以前のトゥルフアン地方の農業生産について我が国において最初に本格的な研究をされたのは、周藤吉之氏であった^③。氏は、七世紀末から八世紀初めの則天武后時代にトゥルフアン盆地の西州において、他人の土地を耕営する佃作が広く普及し、堰頭の作製申告した青苗簿案等を通じ、官田・寺觀田・民田のいずれをとっても自作よ

り小作の方が量的に多い事実を指摘された。続いて西嶋定生氏は、八世紀の西州で唐の均田制が種々な特徴を示しつつ徹底をめざし実施されていたと考えられ、同時に班給地の遠隔地分散・給田の量的不足等により租佃を必然とする構造があったことを大谷文書を史料にして発表された。^⑤

その後、仁井田陞^⑦・堀敏一^⑧・孫達人^⑨・沙知^⑩・池田温氏^⑪等日本・中国の学者により租佃契（土地の賃貸借契約書）の研究が集中的に行われ、八世紀以前のトゥルファン地方の佃作関係を実証的に分析する直接史料として当事者の作製した契の詳細な追求が試みられた。

また最近では、孔祥星^⑫・呉震^⑬両氏の研究もあり、トゥルファン地方の農業生産のうちでも租佃契に関する部分は飛躍的に進歩したように思われる。

さて以上で八世紀以前のトゥルファン農業に関する諸氏の紹介を終るが、それらの研究は大体共通して八世紀のトゥルファン地方の租佃契を通しての土地制度の研究であり、それ以前のこの地方の土地制度・賦役制度については充分に行われているとは言いがたいのである。従って以下では、新出のトゥルファン文書を中心に、中国文献・考古学的遺物を対照させながら、トゥルファン盆地の農業生産の実態を総合的に考えてゆくことにする。

二

先ず第一にトゥルファン地方の農業生産を考察する前提として、この地方の自然的条件に言及することにしよう。トゥルファン地方の中央部を占めるトゥルファン盆地は、天山山脈の東側にある山間の盆地で、囲りを標高一五〇〇—五四〇メートルの天山山脈に取り囲まれている。面積は約五万平方キロ。この盆地は囲りを高山で取り巻かれている為、気温の上るのがすこぶる早く、熱の発散が遅い。従って、夏の気温は非常に暑く、且つ乾燥してい

る。年間降雨量はわずかに二五ミリ程度である。夏季の月間平均気温は三〇度を越え、一九五三年には最高気温四七・六度に達した。

盆地を流れる河川は短く、河水はほとんど地下にしみ込む。その為、地下水は豊富である。この盆地には小麦や綿花を産し、とりわけ瓜類とブドウの栽培が盛んなのは、この地下水を利用しているからなのである。以下では、八世紀以前のトゥルファン地方の農業生産の実態について考えてゆく。

三

トゥルファン地方の農業生産について考古学的遺物の上で明らかになるのは三―五世紀になってからのことで、この地方のアスターナ一三号墓で発見された小麦がそれである。それは、中国の発掘隊によって発見され、晋代（二六五―四〇二年）のものとしてされている。^⑩

尚、五世紀前半の状況を示すものとしては、カラホージャ一号墓で発見された小麦がある。^⑪

さて、この地方の農業生産について史料の上で明らかになるのは、六世紀になってからのことで、梁書（巻五四）諸夷伝・高昌国の条に興味深い一節がある。

備植九穀、人多噉麵及羊・牛肉、出良馬・蒲陶酒・石塩。

これは、トゥルファン地方では九穀（黍・稷・秫・稻・麻・大豆・小豆・大麦・小麦）を植えているが、人々の多くは、麵や羊・牛の肉を食べていたことを示しているのである。また、この地方では、ブドウ酒も産出していたようである。これは恐らく、トゥルファン地方がブドウの生産に適していた為であろう。この一節は、南史（巻七九）夷貊下・高昌国の条にも採録されているが、これは梁書の記事を基にしたと考えられる。

八世紀以前のトゥルファン地方の農業生産について

さて六世紀後半から七世紀初頭になると、農業生産を窺わせる史料も多くなる。先ず隋書（卷八三）西域伝・高昌国の条には、

地多石磧、氣候温暖、穀麥再熟、宜蚕、多五果。

とあり、この地方の農業が、麦と夏作物との年二毛作であったことが分るのである。^⑮ 麦はかなり肥料をくう為、その再熟は考え難く、夏作物としては、黍・粟・稻等が考えられる。以下では、六世紀から七世紀にかけての所謂麴氏高昌時代の土地制度について、トゥルフアン文書と考古学的遺物とを対照させながら考察してゆくことにする。

四

ここでは、六―七世紀のトゥルフアン地方の土地制度を考える上で最も重要な当地方出土のトゥルフアン文書を取上げよう。^⑯

(一) 延昌六年（五六六）呂阿子求買桑葡萄園辞（アスターナ一五二号墓出土）

1 延昌六年丙戌□□□八日呂□□

2 辞子以人微産□□少見康□

3 有桑蒲桃一園□求買取伏願
(鄭(補))

4 殿下照茲所請謹辞

5 中兵参軍張智寿伝

6 令 聴買取

(二) 延昌十七年（五七七）史天濟求買田辞（アスターナ一五二号墓出土）

- 1 □□□_⑤年丁酉歲正月十七日史天濟辭濟□
 - 2 □□薄匱乏非一今見任荀蹄有常田少畝於外□□
 - 3 □□惟
 - 4 □顏矜濟貧窮_⑥□□取以為永業謹_⑦
 - 5 □□_⑧下校郎高慶_⑨
 - 6 令 聽□□
- (三) 延昌三十四年(五九四) 呂浮圖乞質葡萄園辭(アスターナ一五二号墓出土)
- 1 延昌卅四年甲寅歲六月三日呂浮圖辭園家□
 - 2 □_⑩羣用不周於樊渠有蒲桃一園逕理不_⑪
 - 3 □見買得蒲桃利□□□惟_⑫
 - 4 □下悌乞_⑬質取以_⑭存□□聽許謹辭_⑮
 - 5 通□_⑯令史麴儒_⑰
 - 6 令 聽_⑱質_⑲□

これらの文書は、唐長孺氏によつて、その所在が日本の学界に紹介されたものである。^⑳

これら三点の文書によれば、六世紀当時のトゥルフアン地方のアスターナでは、田や園の売買に高昌王の許可が必要であつたことが分るのである。三点の文書のうち「延昌十七年(五七七)史天濟求買田辭」には「貧窮を矜濟し、_㉑□□取、以て永業と為す」と見え、「取」の上の□の第一と原文六行の「令」字の下に「聽」字が残っている。これは恐らく文脈から考えて「買収を聽す」と記されていたのであろう。残りの「延昌六年(五六六)呂阿子

求買桑葡萄園辭」と「延昌三十四年（五九四）呂浮図乞買葡萄園辭」とはいずれも、某地にある一葡萄園を「買収」あるいは「買取」することを請求している。この二点の文書にはそれぞれ「中兵參軍張智寿伝」と「史麴儒伝」とある後に行を改め「令」一字を大書し、下に「買収を聴す」あるいは「買収を聴す」と注されている。これらの文書によって始めて、園を買うには買収の手が申請し、高昌国王の聴許が必要であったことが明らかになるのである。

ところで、六―七世紀の麴氏高昌時代の土地制度と同様に問題になるのがこの時代の農産物についてである。

六―七世紀の麴氏高昌時代の農産物について推定できるのは考古学的遺物からである。それは、中国の発掘隊がアスターナ一五一号墓・アスターナ一五五墓・アスターナ一六九号墓・アスターナ一七三号墓・アスターナ一九九号墓・アスターナ三二九号墓・アスターナ五二〇号墓で小麦を発見していること^②によって分る。またこの地方では、ブドウの生産も盛行していたようである。それは、アスターナ一六九号墓・アスターナ一九八号墓・アスターナ三二〇号墓・アスターナ五二八号墓・カラホージャ五二二号墓からブドウが発見されたこと^③によって分るのである。

さて、トゥルファン地方の農産物については、以上で明らかになったので、ここでトゥルファン地方の田種について考えてみよう。これに関しては、従来多くの学者の言及があるが、部分的な発言が多いので、ここで概観しておくことにする。この問題について最も示唆多い資料は麴氏高昌時代（六―七世紀）後期の質簿であろう。本文書は当時代のトゥルファン地方の土地制度を考える上でも重要なもので、左に全文を掲げる。

高昌（六世紀後期？）孝敬里等質簿三断卷（中国科学院图书馆所藏）

- 1 馮照蒲陶二畝半桑二畝
- 2 常田十畝半
- 3 其他田十五畝
- 4 田地枯棗五畝破為石田畝二斛
与蒲陶二畝半桑二畝
- 5 常田十八畝半其他田七畝
- 6 泮桑二畝半
- 7 得張阿興蒲陶二畝半
- 8 得闕衍常田七畝
- 9 得韓千哉田地沙車田五畝
- 10 得張渚其他田四畝半瓜二畝半
- 11 賞合二百五十七斛
- 12 賞合二百□十□斛
- 13 康豪得田地辛冲蒲陶五畝
- 14 得韓豐田地蒲陶五畝
- 15 棗十畝得牛絹常田五畝
- 16 得闕桃保田地桑六畝入韓豐
- 17 得闕榮興田地常田五畝半
- 18

八世紀以前のトゥルファン地方の農業生産について

19 得闕戩田地桑半畝蒲陶一畝園田十畝入

(後欠)

I 背

(前欠)

1 齊都墾田八畝半常田_{七畝}

2 棗七畝石田三畝桑二畝半

3 得吳並墾田四畝半

4 貴合八十斛

5 右孝敬里

6 扨 竟

7 校 竟

(以下余白)

II

(前欠)

1 次常□ □

2 得范周□ □

3 得董猗奴□ □

4 田地沙車田□ □

5 道人知遣常田七畝貲廿一斛寄貲

6 貲合二百卅三斛五斗

7 關衍桑四畝

8 常田十七畝七畝入馮泮

9 墾田十八畝田地覆十三畝半三斛

10 蒲陶□ □畝二斛

(後欠)

Ⅱ 背

(前欠)

1 得道□ □田一畝半

2 出墾田四畝入田地道人惠政

3 出墾田四畝入保居

4 貲合二百廿一斛五斗

其八十九斛□除
百卅□

(以下 余 白)

Ⅲ

(前欠)

1 □常田□畝
□? □? □?

八世紀以前のトゥルファン地方の農業生産について

2

□□其他田四畝

(後欠)

この文書は、賀昌群氏によって紹介されたものである。^⑤ この文書は、各戸の諸種田額を列挙し、しかる後合計費額を斛高で表示する。田地(城管下の)枯藁五畝は破(荒蕪の意か)して石田となし、畝ごとに二斛(Ⅰ4)、田地(城管下の)藁十三畝半、(畝ごとに)三斛(Ⅱ9)、道人知遣の常田七畝は貲廿一斛(Ⅱ5)を総合すると、一畝が常田と藁で三斛、石田で二斛に評価されていることが分るのである。池田温氏は、この事実を手がかりに、馮照・馮興・馮泮(兄弟か)と齊都について諸種田額と合計費額の関係を推算されているので、次に紹介することしよう。

馮氏の戸は、蒲陶五畝十桑六・五畝十常田二九畝十其他田二二畝十得蒲陶二・五畝十得常田七畝十得瓜田二・五畝十得其他田四・五畝Ⅱ計七九畝×三斛Ⅲ二三七斛。石田(田地枯桑)五畝十得沙車田五畝Ⅱ計十畝×二斛Ⅲ二〇斛。二三七斛Ⅲ二〇斛Ⅲ二五七斛。

齊都の戸は、桑二・五畝十藁七畝十常田七畝Ⅲ一六・五畝×三斛Ⅲ四九・五斛。石田三畝十壘田八・五畝十得壘田四・五畝Ⅲ一六畝×二斛Ⅲ三二斛。四九・五斛Ⅲ三二斛Ⅲ八一・五斛

これによって、ブドウ・桑・ナツメ・瓜の作付地及び常田と其他田が毎畝三石、石田・壘田・沙車田が毎畝二石に換算され、費額が算出されたことになるのである。

以上、六一七世紀の麴氏高昌時代には、アスターナ・カラホージャを中心に小麦やブドウが盛大に生産され、田や園の売買も行われ、園を買うには高昌国王の聴許が必要であったこと、田土が費額評価では常田と石田等の悪田との比は、三二一の比率で評価されたことが明らかとなった。以下では、この時代の賦役制度を取上ることにする。

五

麴氏高昌時代の賦役制度については、周書（卷五〇）高昌の条に、

賦税則計〔田〕輸銀錢、〔田〕無者輸麻布。

とある。他に、北史（卷九七）・通典（卷一九一）にも同様の記事がある。もう他にはなく、実質的に中国の史書としては周書の記事のみということになるのである。

ところで、周書（卷五〇）高昌の条の「〔田〕を計り銀錢を輸む」ことは、トゥルファン文書からも窺うことができる。^②それは、アスターナ七八号墓出土の「高昌將頭守等田畝得銀錢帳」で、この文書によると、参拾歩から銀錢半文、六十歩から壹文を納めていて、田畝の多少と徴納の多少に関係があるようである。他方アスターナ九六号墓出土「延寿八年（六三一）高昌田畝出銀錢簿」では、一部は銀錢二文を納め、一部は三文を納めているが、しかし同じく二文あるいは三文を納める田畝数はさまざまで、例えば五畝八十歩と六十歩がともに三文を納めるというように、二文納める田畝がかえって三文納める田畝より広い場合もあり、所謂「田を計り」というのが田地の面積だけで決まるのではなく、田地の肥瘠が一層重要であったように考えられる。

それでは賦役制度の一環として、トゥルファン地方の耕地におけるブドウ園の役割は如何なるものであったか。

これをトゥルファン文書を中心に一応再検討する必要がある。麴氏高昌時代のトゥルファンの耕地にブドウ園の占める比率は少くない。ブドウ園の收穫物の主要な用途はそれで酒を醸造することであり、徴納されるのも酒で「租酒」と呼ばれていて、その税の性質も租である。「租酒」の具体例はトゥルファン文書に窺えるので、左にその文書を掲げる。^③

(一) 某人請放脫租調辭一 (アスターナ一五二号墓出土)

(前欠)

1 有田桃雜 □□□以 □□□

2 □□ 慈放脫不勝所請謹辭

3 侍 □ 養生 □ 因

4 聽脫蒲 □□ 畝常田肆畝租酒并

令

5 大小調 □□ 除

(二) 某人請放脫租調辭三 (アスターナ一五二号墓出土)

(前欠)

1 □ 下垂慈放脫不勝所請謹辭

2 侍郎養生 □ 因

3 聽脫蒲桃租酒 □ 畝常田肆畝 □□

令

4 □ 調式年余

(三) 延寿二年 (六二五) 正月張憲兒入租酒条記 (アスターナ一五五号墓出土)

1 □ 昌甲申歲租酒肯 □□ 麴延陀侍郎

2 □ 歆隆謝遇海祐 □□ 汜歆伯延壽

3 □年 乙酉歲正 □憲児入

(四) 延寿十三年(六三六) 正月趙寺法嵩入乙未歲僧租酒条記(アスターナ一三八号墓出土)

1 高昌乙未歲僧租究□□下趙寺法嵩参^(得)研^(斗)式晃

2 □軍鞏延岳張慶俊郭榮子翟懷願汜延□□

3 □□歲正月廿六日入

(五) 延寿十三年(六三六) 十二月趙寺法嵩入当□僧租酒条記(アスターナ一三八号墓出土)

1 高昌丙申歲僧租□□住下趙寺法嵩

2 参^(得)研^(斗)式晃参軍張□□飲海杜海明

3 十二月四日入

(六) 趙寺法嵩入僧租酒残条記(アスターナ一三八号墓出土)

1 □□下趙寺法嵩陸^(斗)晃参軍

(以下欠)

これら六点の文書はいずれも、トゥルファン地方のアスターナで発見されたものである。六点の文書のうち「某人請放脱租調辞一」「某人請放脱租調辞二」「延寿二年(六二五) 正月張憲児入租酒条記」には俗人における租酒の規定、残りの「延寿十三年(六三六) 正月趙寺法嵩入乙未歲僧租酒条記」「延寿十三年(六三六) 十二月趙寺法嵩入当□僧租酒条記」「趙寺法嵩入僧租酒残条記」に僧侶における租酒の規定が記されている。このように、七世紀前後のトゥルファン地方のアスターナでは、租酒が僧・俗に分かれていたことは明らかである。

尚翹氏高昌国における商税の問題が残されている。商税については、隋書(卷八三) 高昌の条に、

八世紀以前のトゥルファン地方の農業生産について

有商胡往來者、則稅之送於鉄勒。

とあり、高昌に商税が存在していたことを示している。またトゥルファン文書のうち、アスターナ五一四号墓出土の「内蔵奏得称価錢帳」には金・銀・香の数量が記され、あるものは数量がかなり大きく、いずれも価格は記されず、ただ某人のところで錢一乃至四文を得たと注記されるだけで、半月で集計されている。もし半月の間に貨の無いときは、「某月一日から十五日（あるいは十五日から廿九もしくは卅日）まで称価錢なし」と記されている。これによって徴収された錢を「称価錢」と呼んだことが分る。「称価」は評価の意味で、商貨の到着後官府が評価を行って規定の錢を徴収したものとみられるのである。ここで納められた錢は少額で、正式の商税ではないようである。

以上に述べたことをまとめると、結言は次のごとくなる。

- 一、トゥルファン地方の農業は、恐らく麦と夏作物との年二毛作であつたであろう。
- 二、六―七世紀の麴氏高昌時代のトゥルファン地方では、田・園を買うには買い手が申請し高昌国王の聴許が必要であつた。
- 三、トゥルファン地方のうち、アスターナ・カラホージャを中心に小麦やブドウ等の農業生産が盛大に行われた。
- 四、田土は、費額評価では常田と石田等の悪田との比は三二一の比率で評価された。
- 五、トゥルファン地方の賦役制度については、田租・葡萄園租酒・商税に関する規定がトゥルファン文書によって一層明らかとなつた。

- (1) 「田を計り」というのは、トゥルファン文書により田地の面積だけで決まるのではなく、田地の肥瘠が一層重要であつた。

(2) 葡萄園(ブドウ園)の收穫物の主要な用途はそれで酒を醸造することであり、徴収されるのも酒で、「租酒」と呼ばれていた。

(3) 高昌に商税が存在し、オアシス社会の高昌と北方遊牧民の鉄勒との共生関係も見られた。

註

① 宮崎純一「八世紀以前の中央アジアの農業問題についてータリム盆地地方を中心として」古代文化第三十五卷第八号、昭和五十八年参照。

② 本講演の主内容については、唐長孺「新出吐魯番文書発掘整理経過及文書簡介」東方学報(京都)第五十四冊、一九八二年参照。

③ 国家文物局古文獻研究室・新疆维吾尔自治区博物館・武漢大学歴史系編「吐魯番出土文書」第一卷―第五卷、文物出版社、一九八一―八三年。

④ 大谷文書については、龍谷大学西域文化研究会編「大谷探検隊将来西域出土古文書目録 社会経済関係其一・其二」、一九五六年参照。

⑤ 周藤吉之「倂人文書の研究―唐代前期の倂人制」西域文化研究第二、法蔵館、一九五九年、九一―一三二頁、図版二―一。後に同著「唐宋社会経済史研究」東京大学出版会、一九六五年に「倂人文書研究補考―特に郷名の略号記載について」を加えて採録。同書一―一四六頁。

⑥ 西嶋定生「吐魯番文書より見たる均田制の施行状態―

給田文書・退田文書を中心として」西域文化研究第二、

法蔵館、一九五九年、一五一―二五〇頁、図版一―三三。同「吐魯番文書より見たる均田制の施行状態―補遺・補正」西域文化研究第三、法蔵館、一九六〇年、四六七―八〇頁、図版三九―四〇。後に兩篇をまとめ補訂を加えて同著「中国経済史研究」東京大学出版会、一九六六年に採録。同書四三一―七二六頁。

⑦ 仁井田陞「スタイン第三次中亞探検将来の中国文書とマスベロの研究―法律経済史料を中心として」史学雑誌第六十四編第六号、一九五五年、五九―六〇頁。同「吐魯番出土の唐代取引法関係文書」西域文化研究第三、法蔵館、一九六〇年、一九五―二〇〇頁。この兩篇は後に同著「中国法制史研究―土地法・取引法」東京大学出版会、一九六〇年に訂正収録。又同「吐魯番発見の唐代租田文書の二形態」東洋文化研究所紀要第二十三冊、一九六一年、一―一四頁。後に同著「中国法制史研究―奴隸農奴法・家族村落法」東京大学出版会、一九六二年に訂補収録。同「吐魯番発見の高昌国および唐代租田文書」東洋文化研究所紀要第二十九冊、一九六三年、一―一九

頁。後に同著「中国法制史研究―法と慣習・法と道德」東京大学出版会、一九六四年に訂補収録。

- ⑧ 堀敏一「トゥルファンの佃人制をめぐる二、三の問題」歴史学研究二四二号、一九六〇年、五六―六二、一四頁、同「唐代租田文書私見」岩井博士古稀記念典籍論集、一九六三年、六一―一二八頁、同「西域文書よりみた唐代の租佃制」とくに均田制およびその崩壊過程と関連して」明治大学人文科学研究所紀要第五冊、一九六六年、一―四七頁。

- ⑨ 孫達人「対唐至五代租佃契約経済内容的分析」歴史研究一九六二年第六号、九七―一〇七頁。

- ⑩ 沙知「吐魯番佃人文書裏の唐代租佃関係」歴史研究一九六三年第一号、一二九―三九頁。

- ⑪ 池田温「中国古代の租佃契」上・中、東洋文化研究所紀要第六十冊・六十五冊、昭和四十八年・五十年。

- ⑫ 孔祥星「唐代前期的土地租佃関係―吐魯番文書研究」中国歴史博物館館刊一九八二年第四期、四九―六八頁。

- ⑬ 吳震「近年出土高昌租佃契約研究」新疆歴史論文統集、新疆人民出版社、一九八二年、一〇六―一六四頁。

- ⑭ 地下水に比較的恵まれた地点の近くに成立したオアシスの他に、かなり離れたところから水を導くことによつて、人工的に作られたオアシスもある。このような新しいオアシス作りには、カーリーズとかカナートとか呼ば

れるトンネル式地下水路が用いられたし、現在の新疆ウイグル自治区でも、主として比較的富裕なトゥルファン盆地で用いられている（護雅夫「草原とオアシスの人々」人間の世界歴史七、三省堂、一九八四年、七〇・七二頁）。

- ⑮ 藤堂明保「西域紀行」旺文社、一九八四年、一五〇・一五一頁。

- ⑯ 王炳華「新疆農業考古概述」農業考古一九八三年第一期、一一八―一九頁。

- ⑰ 王炳華前掲論文一一八頁。

- ⑱ 堀氏は北史（卷九七）西域伝・高昌の条に、「穀麦一歲再熟」とある記事を、トゥルファン文書に「麦秋」、「秋麦」等の語があり、夏・秋二回の租佃徴収の例があることを根拠に、麦の二期作を示すものと解釈されたが（堀敏一前掲論文「唐代の租佃制」五頁）、少しく配慮を欠いた考察と思われる。それは、麦のうち特に小麦は、かなり肥料をくう為、麦の二期作すると春麦の出来があまりよくないと考えられるからである。

- ⑲ この点に関して、米田賢次郎氏から貴重な御教示をいただいた。

- ⑳ 註③参照。

- ㉑ 唐長孺前掲論文八八頁。

- ㉒ 王炳華前掲論文一一八―一九頁。

②③ 王炳華前掲論文一一八一—一九頁。

②④ 大谷文書には、常田・部田の田種区別が一般に採用されている。常田・部田の語義の問題について最も詳細な検討を加えたのは、西村元佑氏である。西村氏は、「常田は部田に比して土地が少くかつ良質の土地で、給与面においても少額しか給与されなかつたものであり、部田は常田に比して土地が多くかつ劣等で、給与面においても多額給与されたとみてよい。そしてこれは推測であるが、常田という文字から見て恒常的に作物を栽培できる土地であり、これに対して部田は土地が瘠せているかまたは土質に何等かの制約があるかして、作物の栽培が普通の土地よりもやや不利な状態におかれている劣等の土地であつたと思われる。このことは、部田の全件数中約二五パーセントが易田であることによつても補助的に説明がつくと思う」(西村元佑「中国経済史研究」同朋舎、昭和五十二年、三九五頁)と解され、これが通説となっているようである。但し、宮崎市定氏は西村説を相当修

正する解釈として、常田は通常田で連作地であり、部田は倍田に他ならず隔年耕作地(易田)を意味し、一丁当りの給田基準額は常田五畝十(一易)部田一〇畝、あるいは常田五畝十三易部田一五畝、すなわち常田に換算すれば一〇畝であつたと論ぜられた(宮崎市定「トゥルフアン発見田土文書の性質について」史林第四十三卷第三号、一九六〇年)。部田のすべてが易田(宮崎説)なのか、あるいはその一部が易田(西村説)かはまだ充分に明らかにされていないが、もしすべて易田とすると、常田との対比が鮮明となるであらう。

②⑤ 賀昌群「漢唐間封建土地所有制形式研究」上海人民出版社、一九六四年、三六六—七頁。

②⑥ 池田溫「中国古代の租佃契(上)」東洋文化研究所紀要第六十冊、昭和四十八年、五五—六頁。

②⑦ 註③参照。

②⑧ 註③参照。

(佛敎大学研究生)

